
最高の親友（ライバル）

ただのものかき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最高の親友^{ライバル}

【Nコード】

N9859P

【作者名】

ただのものかき

【あらすじ】

サウスタウンより名を馳せた流派『極限流』。
その道場の中で日々稽古に励むのは、『無敵の龍』リョウ・サカザキと、その妹ユリ。
それぞれが譲れない想いを抱き真摯に稽古に励む中、道場に現れたのは…。

(前書き)

この作品は、あくまで「KOF」の世界観を元にしていきます。
したがって設定そのものがパラレルワールドで、どこかしら曖昧な
ものになっておりますので、ご注意ください。

では、ここから幕開けとなります。
最後までお付き合い頂けると幸いです。

「きゃあっ!!」

ドサツ、ザザザツ…。

「ふう…」

檜作りの道場、まだ誰もいない時間。

この国（アメリカ）には不似合いとも言える純和風…。

そんな神聖さすら感じられる道場の中、響く声。

響いた声は、まだ女性というには若い、大人にな

りかけの女の子の声

その正面に、両の腕を美しい直角に折り曲げ、腰に揃えての息吹を
行うは今まさにその女の子が戦っていた相手。

乱れらしい乱れなどなく、過ぎたほどに純粹とも、愚直とも言える
不器用さに満ち溢れ…

それでいて神秘的な真っ直ぐさに満ち溢れた構え

男の名はリヨウ・サカザキ。

このサウスタウンにてその名を馳せた流派、『極限流空手』の二代目であり…

同時に『無敵の龍』とも呼ばれる、世界でも屈指の格闘家だ

「…いったあ……」

その『無敵の龍』に倒された女の子が起き上がる。

恨みがましさを含んだ顔でリヨウを睨んで半身を起こす彼女は、ユリ・サカザキ。

目の前にいるリヨウの実の妹であり、また女性でありながら世界に名を馳せている極限流の格闘家でもある。

ユリ「むうっ…また勝てなかった…」

年齢よりも幼さを感じさせる膨れた顔で兄を睨みつけるユリ。

道場の床に腰を下ろし、半身を起こしただけの状態だ。

『綺麗』よりは『可愛い』の方に偏ってはいるが、作りそのものは美しいその顔は、見るものが見れば心奪われるものとなっている。

リヨウ「まだまだだな、ユリ」

そんな妹に対し、男の魅力に溢れた精悍な顔に爽やかな笑みを浮かべながらの酷評。

だが実際には実力の差などほばないに等しく、いつ自身が敗れることになってもおかしくなどない。

この笑顔は、そういつた妹の目覚しい成長からも来るものである。もちろん、リヨウ本人はそれを伝えることもすることはなく、ただユリの不機嫌を煽るだけとなるのだが。

ユリ「ふんだ！もうすぐお兄ちゃんなんか、一捻りにしてやるんだからね！！」

案の定、そんな余裕しゃくしゃくのリヨウの笑顔に可愛らしい負け惜しみが飛び出すユリ。

しかし、父・タクマから受け継がれた彼女の格闘才能（センス）は間違いなく兄を上回るものであることに疑いはない。

極限流の稽古に取り組み始めてからわずか一年で、先を進んでいた兄とまともに戦えるほどの

5

無論、その過程には彼女自身のたゆまぬ努力もあつてのこと。だが、それを差し引いても恐ろしいといえるほどの才能（センス）だと言えよう。

リヨウ「（間違いなく才能（センス）でいえば俺より遙かに上だ…我が妹ながら大したもんだよ…）」

自身がその身にどれほどの傷を負うことになるうとも臆することなく前に進み、護り続けてきた大切な存在。

その大切な存在の類まれなる才能（センス）に気づいた時の複雑な思い。

喜びと

自身をも上回る格闘家になれると確信したときの

空虚な想い

もはや自身が護る必要などないと確信したときの

相反し、矛盾するその想いを自覚した時の心境。
あれは、今でも忘れられない。

リョウ「ははは、その時を気長に待ってるよ」

一時はどんなことをしてでも極限流（このみち）に関わらせない…。
だが、それすらも押し切ってこの妹は自分で歩み始めた。
どんな想いで歩み始めたのかは分からない。
今でも。

だが、この大切な存在がそうすることを願うなら…。
自らが高い目標となって…。
同時に道標となってこの妹を導いていこう。
この孤高の龍は、自らに厳しく修行を課しながらも。
そう想い、そして、そう取り組むことにした。

ユリ「む〜〜〜〜っ！！！！」

そして、この妹は、誰にも譲れない想いの元に極限流（このみち）
を歩み始めた。

今までたった一人で自分を護り続けてきてくれた

兄のため

自分のために傷つき。

自分のために苦勞し。

自分のために自身の幸福まで捨てて。

それでも笑って自分のために生きてくれた兄のため

だからこそ、強くなりたい。

だからこそ、戦えるようになりたい。

だからこそ、超えたい。

この兄を。

もう護られるだけの存在になりたくない。

これからは、自分がこの兄を護り、支えていきたい。

今までもらい続けてきたものを、少しでも返したい。

だからこそ、今日の前にいる『無敵の龍』を、超える自分になりたい

言葉にできない、誰にも伝えられない。

それほどにまで、膨れ上がった想い。

その一途な想いのために、彼女は戦うことを始めたのだ。

ユリ「（こんなんじゃないだめ！！こんなんじゃない、お兄ちゃんを護ると

「ころか、護られるだけじゃない！！もう護られるだけなんて嫌！！」
「リヨウ」（何を想っているのかは分からないが…随分と真摯な顔をするようになったな…）

本来が天真爛漫で快活なため、礼節を重んじるといった部分に欠けるところが多いユリだが…。
そんなユリがこれほどに真剣そのものな表情を見せるのは嬉しくもあり、寂しくもあるリヨウだった。
そんな中…

パチパチパチ…

ユリ「!?!」

閑散とした…それでいて神聖とも言えるであろう雰囲気壊す拍手。そこにいるのは…。

「二人とも、いいファイトだったぜ」

夏の快晴の時の太陽のように陽気さに満ちた表情をその端正な顔に貼り付け。

煌くような腰の下まである長い金色の髪を軽く揺らし。

重厚で屈強な…それでいて無駄のないモデルのようにシャープな体。

ユリ「テリーさん!!」

テリー・ボガード。

このサウスタウンの帝王とまで呼ばれたギース・ハワードを倒した英雄。

そして、『伝説の狼』とまで呼ばれるほどの流浪の格闘家だ。

リョウ「なんだ。人様の稽古を覗き見たなんて趣味が悪いな」

テリー「よく言っぜ。俺が見ているの知ってて無視してたくせによ」

気さくに笑いながら語り合う二人。

出会ってからの時間はそれほどでもない二人だが…。

まるで何十年も付き合ってきたかのような自然な語り合いとやりとり。

ユリ「え？テリーさん…ずっと見てたの？」

しかし、ユリはある一点のことに思考を奪われていた。
そう

この兄との稽古…いや、戦いをずっと見られていたということに

テリー「おう、見てたぜ。ユリちゃんすげえ上達したな」

思考が定まりきらないところに自分に向けられた言葉。

『伝説の狼』から、一人の格闘家への。

ユリ「え？…ホントですか？」

テリー「ああ、ホントホント。こりゃあ、この『無敵の籠』を超える日も近いんじゃないかねえかな？」

リョウ「何を言ってる。ユリなんぞまだまだだ」

相変わらず武骨で辛口な兄の評価。
でも、その兄と並ぶほどの『伝説の狼』からの高評価に、自然とユリの顔が緩む。

ユリ「そっか…上達してたんだ。私。よし！もっと頑張るぞー！」

テリー「そうそう、その意気だぜ……」（フツ）
リョウ「……」（フツ）

普段兄からはまずもらえないであろう高評価の言葉。
どうせならこの兄からもらいたかったという思いもあるが、その兄と肩を並べる存在に認められたという事実。

その事実には、ユリにいつもの自信と明るさが戻る。
その事実には素直に喜んでいたがゆえに気づけなかった。

この時の二人の笑みに、どんな意味があったのか

リョウ「さあ…ここまで来たってことは、そういうことなんだろう？」
テリー「ああ、そういうことだぜ」
ユリ「？」

その言葉が何を意味するのかが分からず、ただ疑問を顔に貼り付けるしかできないユリ。

しかし、その疑問はすぐに解消することになる。

ここまで和やかな雰囲気が一瞬にして、張り詰めた緊張感に包まれたから

もう言葉はいらない。

言葉などなくても分かる。

これから、この二人がどうするのか。

リョウ「ここだとヘタに壊されたりしたら困るから場所を変えようか」

テリー「ああ、俺もそう言おうと思ってたところだ」

リョウ「ウチは貧乏道場だからな。頻繁に修理できるだけの金はないしな」

テリー「かといって俺に請求されても、俺も金なんかないしな」

会話そのものは笑いあいながらの冗談の応酬にすぎないが…。

すでに二人がその身にまとう雰囲気語っている。

すでに、準備は整っている、と。

ユリ「す……凄い。二人とも普通に笑ってるだけなのに……こんな、押し潰されそうな重圧（プレッシャー）が……」

その二人のそばにただで、密室の中の壁が自分に迫ってくるかのような重圧。

それなのに、当の二人は意にも介さずに向き合っている。

これが、戦うってことなんだ

『稽古』という、修行の場でもなく。

『大会』という、競技的な場でもなく。

ただ、戦う。

己の全てを賭けて。

恐ろしく単純（シンプル）で、恐ろしく過酷。

これまで、『稽古』『大会』という場での戦いしか経験のないユリ。そのユリにとっては、この二人の『戦い』は、まさに未知の領域となろう。

リョウ「さあて、行こうか。『伝説の狼』」

テリー「ああ、『無敵の龍』」

テリー・リョウ「俺たちの戦場（ステージ）へ」

神々しい美しさすら感じさせる微笑を浮かべながら、二人の闘士が自らの戦場（ぶたい）へと足を進める。

ユリ「（怖い…でも、でも見てみたい…あの二人の戦いを…）」

震えの止まらない足に渴を入れ、その闘気に押されながらも、ユリは二人の後を追う。

リョウ「ここなら、何の気兼ねもなくやれるな」

テリー「ああ、あの道場の中だと壊したら後がおつかないからな」

違う、とリヨウは笑う。

二人が選んだのは、街外れの広大な大地。

どのくらい距離があるのかも気にならなくなる雄雄しい山々を背景とした…。

しかし、後は見渡す限りの地平線。

周囲に物らしい物は何一つなく、まさに『気兼ねなく』戦える舞台となっている。

ユリ「一体、どんなことになるんだろう…」

この二人の戦いを見守る唯一の観客（ギャラリー）となるユリ。

二人の間の空気はもう一触即発の状態。

その部分を中心として放たれる闘気が、この周辺一体を覆いつくさんかのようだ。

テリー「さあ始めようぜ。俺たちの戦い（パーティ）をな！」

その声がかきつけとなる。

リヨウ「いくぞ！！『伝説の狼』！！」

ついにこの世界でもトップクラスとされる二人の戦いの火蓋が、切って落とされた。

二人同時に猛然とダッシュし、間合いを詰めていく。

リヨウ「！！？」

その瞬間、テリーはすでに技のモーションに入っていた。

そして、リヨウがそう認識した瞬間

テリー「Are you OK!？」
アークオーケイ

背筋に感じた恐怖。

その刹那の瞬間、リヨウはその丸太のような腕を固め、防御に全身全霊を傾けた。

幾多の修羅場を潜り抜けてきた男の本能がそうさせた。

そして、その瞬間

ヒュン…ツドゴオオオオツ!!!!!!!!!!!!!!

自分の視界に閃光が煌いたかと思えば、それと同時にガードを固めた腕に衝撃が走る。

寺の釣鐘を突くかのように巨大な力で前方から一点を突かれたかのような。

そのあまりの重さに

リヨウ「ぐううううううう!!!!!!!!!!!!!!」

ピキッ!!

踏ん張った足元　　アスファルトの地面　　がヒビ割れる。

しかし、攻撃はまだ終わらない。

この恐ろしい攻撃を放った狼はすでに次の牙を剥いている。

ユリ「な…何？今の？…」

見えなかった。

一体何をしたのか。

それすら分からなかった。

閃光が走ったかと思った瞬間、あの狼の拳は龍の腕に食い込み…。さらには強大な闘気の大爆発で吹き飛ばしていた。

大地を大きく揺るがすほどの威力で。

兄はあの攻撃を前進しながらもガードでしのぐことができた。
自分なら？

おそらく、あの攻撃をまともに食らって何をされたかも分からない
うちに負けていただろう。

ユリは、自ずとそう考えていた。

いや、考えざるを得なかった。

リョウ「（これだ…これでこそ『伝説の狼』…俺が戦いたかった相
手だ！）（ニイ…）」

腕の痺れはまだ取れない。

この時に攻め込まれたら成す術などないだろう。

それほどの強さを、目の前のあの男は秘めている。

しかし、何故か笑ってしまふ。

怖いと思う理性に反して、本能が楽しいと感じてしまふ。
心が、体が、全てが震えるほどに。

テリー「（ニイ…）これくらいで終わるタマじゃねえだろ？行くぜ
！！」

そして、それはこの男も同じ。

その楽しさ、喜びを全身で表すかのごとく、目の前の相手に向かって突進していく。

伝説とまで称された強さを、餓えを、むき出しにしながら。

リョウ「（防御に回ったら終わりだ…攻撃だ！！）」

未だ回復に至らない左腕を庇ってしまえばその時点で勝負が決まってしまう。

ならば、前に出るしか、攻めるしかない。

何もしいまま、この最高の時間を終わらせてなるものか。
その想いを、数多の強敵を打ち砕いてきた右の拳に乗せる。

ありったけの闘気と共に

テリー「！！（ヤベエー！！）」

無敵とまで称された龍の牙が放たれる。

狼の本能が、敏感に己の危機を感じ取る。

リョウ「一撃

」

握り締められた拳から。
溜めを作らんがごとく捻られた全身から。
凄まじいほどの力が発する。
そして、その力を

リヨウ「 必殺!!!!!!!!!!!!!!」

目の前まで突進してきた狼に解き放つ。

天地霸王拳。

そう彼自身が名づけた、一撃必殺の拳を。

テリー「くっ!!!!!!!!!!!!!!」

武士の居合いのように、閃光のごとき速さの正拳が狼を襲つ。
かるうじて、刹那の差で、狼のガードが間に合う。
が

ドゴオオオオオオオンッ!!!!!!!!!!!!!!

テリー「うおおおおおおおおおっ!!!!!!!!!!!!!!」

先ほどやられたことをやり返さんがごとく。
この拳を受けたテリーの体を大きく吹き飛ばす。
ガードされたことなどお構いなしに。

テリー「く……(ザッ……)」

吹き飛ばされた体を護るように、どうにか着地には成功することができた。

しかし、着地はできたが、ガードした腕には

テリー「へっ…相変わらずとんでもねえ威力の拳だな…」

『無敵の龍』が誇る一撃必殺の威力の証が、明確に残っていた。

テリー「まだまだ…これからだぜ。なあ、リヨウ!!(ニイ…)」
リヨウ「当然だ!!まだまだこれからだぜ、テリー!!(ニイ…)」

お互いが一撃必倒…。

いや、一撃必殺の強さを持っている。

へたをすれば死んでもおかしくないほどの。

だが、その片鱗を目の当たりにしても…。

とてつもないほどに強い相手と戦えることに自身の全てが震えるほどの喜びと楽しさを感じてしまう。

ここにいるのは人ではない。

戦うことに餓え、強い者と戦うことしか知らない、ただの二人の修羅が、そこにいた。

ユリ「な…なんで?…」

なんでそんなに楽しそうに笑えるの?二人とも。

どっちの攻撃も、一歩間違えたら死んでてもおかしくなかったんだよ?

それに…。

ユリ「どうして?…。」

大会で見るテリーさん…。

普段から稽古として戦ってるお兄ちゃん…。

どっちも、全然違う。

強さが、別次元みたいに…。

ユリ「…勝てない…私じゃ…」

ユリも大会によく出るようになり、その中で強敵とぶつかり、その強さを磨いている。

しかし、自分の視界に映る二人の姿は、まるで普段とは別物の強さを発揮している。

自分がまるで成長していないと思わされるほどに

そう、思ってしまうほどに、あの二人の強さの桁が違う。

一体、何がそこまで違うのか。

ユリには、いくら考えても分からなかった。

テリー「おおおおおおおおおおお!…!…!…」

リョウ「おおおおおおおおお!…!…!…」

ブン…ガシイッ！…！！

鼻と鼻がぶつかるほどの超接近戦。

常人が見れば一瞬光ったようにしか見えないほどに早い拳がお互いを打ち抜こうとする。

が、どちらももう片方の手でしっかりとその攻撃を受け止めていた。

テリー「（ニヤ…）すげえ…やっぱりアンタはすげえ…その強さ…背筋を貫くほどに感じるぜ…」

リヨウ「（ニヤ…）そういうアンタこそ…全身が震えるほどに感じるよ…その強さを…」

もはや狂気にとりつかれているといっても過言ではない。
一歩間違えれば命を失ってもおかしくないこのやりとり。
そんなやりとりの最中、どうして笑えるのだろうか。

リヨウ「おおお！…！！」

龍が猛る。

その屈強な左拳が、最短距離でテリーに襲い掛かる。

テリー「ハアッ！…！！」

龍に負けじと狼が吼える。

相手の拳の軌道上に、自らの左拳を繰り出す。
何のためらいもなく。

ズガアアアアアアアアンツ!!!!!!!!!!!!!!

テリー「ぐおっ!!!!!!!!!!!!!!」

リヨウ「ぐうっ!!!!!!!!!!!!!!」

ザザザザザ……

鉄球で建築物を破壊するかのような轟音が辺り一面に大きく響き渡る。

拳と拳がぶつかりあった反動で二人の距離が離れる。

離れた距離の大きさが、その拳の破壊力を象徴している。

離れた間合いの均等さが、お互いの拳の破壊力が互角だということを象徴している。

テリー「まだまだあ!!!!!!!!!!!!!!」

リヨウ「これからあ!!!!!!!!!!!!!!」

壮絶な拳のぶつかり合いからすぐに立ち直り、互いに一步も引く様子すら見せずに向かっていこうとするその姿。

まさに戦いに餓えた戦鬼ともいえる姿。

リヨウ「虎砲疾風拳!!!!!!!!!!!!!!」

一瞬身を引いたかと思うと、そこからの反動で強力な前進力と共に拳を繰り出す。

虎砲疾風拳。

拳による拳撃を得意とするリヨウの得意技の一つだ。

それに対し

テリー「(ニヤ…)へへ…すげえよアンタ…以前戦ったときよりもさらに強くなってるじゃねえか…さすが『無敵の龍』だ…!!!」

リョウ「(ニヤ…)冗談じゃない…どうしたらそこまで強くなれるんだ…これが…これが『伝説の狼』か…!!!」

上体だけを起こした状態で互いに視線を絡めあう。

自身の想像を遥かに超える強さの相手に体中の細胞が震え上がる。

しかし、闘気も、闘争心も萎えるどころかますます膨れ上がる。

決して引こうとしない闘争心が、この二人の体をさらに激しく動かす。

テリー「おおおおおおおおおおおおおあああ…!!!」

「!!!」

リョウ「ぬあああああああああああ…!!!」

「!!!」

ユリ「す、すごい…すごいすぎるよ…」

次元が、違う。

大会で見た二人の強さだって勝てる人間がどれだけいるんだ、と言えるほどの強さだったのに。

今の二人は、その強さすら遥かに凌駕している。

ユリ「虎砲疾風拳だって、バーンナックルだって、大会で見たのよりも全然速いし、重い…」

すでに見たことのある技ひとつにしても、その基本性能自体がまるで違う。

どうして。

一体何が、自分とあの二人と違うのか。

ユリ「テリーさんだって、私は上達したって言ってくれたのに…」
体何が…」

そこまで口に出して、ふと止まった。

ユリ「『上達した』?…」

その言葉に妙な引っかかりを覚え、思わず復唱する。
思いつく。

あの二人は、お互いを認める時に…

『強くなった』

そう、言っていた。

ユリ「そういえば…『上達した』とは言ってもらえたけど…『強くなった』って言ってもらえてない…」

そう、そこに答えがある。

ユリは、才能（センス）では『無敵の龍』と呼ばれた兄をも遙かに凌ぐものを持っている。

才能（センス）、では

そして、極限流の空手家として優秀な指導者に教えを請い、努力を重ねてきた。

だが、その素晴らしいまでの才能が、彼女にあるものを欠落させてしまうことに。

そう、『基本』という、最も大事なものを

なまじ人よりも合理的に吸収できてしまうことにより、最も重視すべき『基礎』を固めることがおろそかになってしまっていたのだ。『基礎』というものは、ただその仕組みを理解しておけばいいというものではない。

『理解している』だけではいざというときには使えない。

『気の遠くなるような反復で体にそれを焼き付ける』ことをして、初めてその『基礎』は、己にとって強力な武器となる。

さらには、『優秀な指導者がいた』こともマイナスに働いた面もある。

『教えてもらうこと』が当然となってしまう部分があり、自分が分からないことに対しての反応が極端に鈍い面がある。

そして、それが彼女の最も多い負けパターンとなっている。

いくら才能に秀でていても、結局は『見守られた強さ』の域を脱していないのだ。

リヨウ、テリーの二人は違った。

リヨウは父・タクマと別れてからはその身そしてその命をも賭け、その実戦の中で試行錯誤しながらもたった独りでその重厚な強さを

手に入れてきた。

テリーは父・ジェフを失ってからたった独りで己のスタイルを創り上げ、その身その命を賭けた実戦の中でひたすら己の牙を磨いてきた。

片方は、その大切な存在をその手で護り抜くために

片方は、大切な存在を奪われたことで復讐にその人生を捧げるために

『弱肉強食』という最も単純で最も過酷な世界の中、命がけで練り上げてきた強さ。

肉体のみではない、魂まで練り上げられた
本物の『強さ』。

些細なようで、決定的に大きな違い。

『競技者』としての『競う』強さではない。

『一介の生物』としての『生き残る』強さ。

それが、彼らと彼女の決定的な違い。

彼女には、未だ想像もつかない領域。

ゆえに、その違いに気づくことは、できなかった。

ガシッ！！

リョウ「ぐっつっ！！！！！！」

狼の一撃が龍を捉える。
が

リヨウ「ぬんっ！！」

ドゴッ！！

テリー「ぬああっ！！！！！」

即座に龍の返しが狼に刺さる。

鼻と鼻がぶつかるくらいに超接近戦で互いに一步も引かない攻防。

彼ら以外の格闘家なら一撃必倒の攻撃が、うなりをあげて飛び交い続ける。

しかし

テリー「へへっ…これだ…これが、俺の望んでいたファイトだ！
！こんな最高のファイト、簡単に倒れてられるか！！！」

物心ついたときには復讐にその身を焦がし、憎しみのみを糧に戦い続けてきた孤高の復讐者（リベンジャー）。

いつからか、『復讐という目的を果たすため』の過程に過ぎなかったものが

自分と同じ、この道でしか生きられない者達との『最高の語らい』
となっていた。

そして、目の前に立ちふさがる強敵と、全力を尽くして戦う（かた
らう）。

互いの想い、互いの人生、互いの強さを全てさらけ出し、競い合う。
今、自身が認める最高の強者との戦い（かたらい）。

全てをさらけ出し、この最高の相手に目一杯の感謝を持って、この最高の強さを超える。

それまでは、決して倒れない。

リョウ「ははは…すごい！…こんな…こんな素晴らしい…楽しいファイトになるとは！…負けられない！…そして、倒れるわけにはいかない！…」

人一倍の優しさを持ちながら、大切な存在のために心を痛めながらも戦わざるを得なかった日々。

戦うことは、『何かを護る』ための手段に過ぎなかった。

それしかなかったがゆえに、心の痛手は日に日に膨れ上がっていった。

しかし、目の前の男と初めて戦った時、初めて戦うことが楽しいと感じることができた。

奪うのではない、傷つけるのでもない

ただ、己の全てを持って相手と戦う（かたらう）。

己の全てをさらけ出し、戦うことの楽しさを教えてくれた男に目一杯の感謝を持って、目の前の計り知れない強さを乗り越える。

それまでは、倒れるわけにはいかない。

テリー「へヤアツ！…！…」

炎と化した闘気を左拳に纏い、最短距離を一気に振り上げる。

バキイツ！…！…！

リョウ「ぐああああっ！…！…！…」

龍の顎を貫くかのように、天空に跳ね上げる。
そこから、さらに

テリー「ハアツ!!!!!!」

ズガアツ!!!!!!

リョウ「ぐうあああああっ!!!!!!」

炎と化した闘気を纏った右拳が、返しの一撃となって打ち下ろされる。

顎を天に向けられたところに、その一撃が人中に突き刺さる。
クイククバーン。

接近戦でその威力を発揮する、コンビネーション・ブロー。
バーンナツクルの重さに速さを加えた、強力無比な必殺技だ。

リョウ「ぐううっ……」

二つの人体急所を的確に打ち抜かれ、リョウの足がふらつく。
頭部を連続で攻撃されたこともあり、脳が揺らされてまともに立っていることも危うい。

テリー「Kick Butt!!!!!!」
キックバット

このチャンスを逃すまいと、身をかがめて体を大きく捻り、その反動を利用して弧を描くように飛び上がり、上から蹴り下ろす。

クラックシュート。

テリーが得意とするキック系の必殺技だ。

一気に畳み掛けようとする狼。
だが

リヨウ「させんっ!!…虎砲!!…!!」

グシャアッ!!…!!

テリー「うあああっ!!…!!」

弓を引き絞るように身をかがめ、そこから反動で体ごと天空を貫くように拳を繰り出す。

クラックシュートの軌道を捉え、見事にカウンターを成立させる。

虎砲。

極限流空手の技のひとつで、対空迎撃を主とした必殺技だ。
畳み掛けようとしたところに逆にカウンター。

テリーの体が、大きな音を立てて地面に打ち付けられる。

テリー「ぐ、おおおっ…」

クラックシュートの威力をカウンターで倍返しにされたテリー。

だが、震える体を揺らしながらも、なお起き上がってくる。

リヨウ「ぐ、ぬっっ…」

しかし、クイックバーンで脳を揺らされたリヨウのダメージも大きい。

畳み掛けることもできず、どうにか体勢を整えることに全神経を集中している。

テリー「(ニイ…)ま…まだ…まだ…こんなんじゃ、終われねえ…
そうだろ?…『無敵の龍』?」

リョウ「(ニイ…)あ…ああ…こんな最高のファイト、このくらいで終わらせられねえ…なあ?『伝説の狼』?」

互いに定まらない足取りを整える作業の最中。

どちらが先にダメージから立ち直ってくるのか。

しかし、そんな緊迫した場面でも…。

心の底からこの戦いを喜び、楽しんでいる二人。

まだ、戦いは終わらない。

ユリ「す…すごい…すごすぎるよ…二人とも…」

『伝説の狼』と『無敵の龍』の戦い。

それは、まさに凄まじいの一言に尽きる。

リョウは、その優しさがゆえ

テリーは、その陽気さゆえ

本来持ちえる強さを発揮できる場面に巡りあえることがなかった。

リョウは、生来の優しさがゆえに、無意識のうちにその図抜けた強さに枷(リミット)をかけてしまっていた。

そのため、本人は全力を出しているつもりでも、それはあくまで『競技のうえでの全力』に過ぎなかったのだ。

生物の生存本能に訴えかけるほどの状況にならない限り、その力が解放されることはなかった。

しかし、今彼の目の前には、その全力を惜しみなく発揮できる存在がいる

その枷（リミット）を解放したりヨウの強さ

それは、実の妹であり、同じ極限流の空手家であるユリですら見ることはできなかった。

そして、その強さは、間違いなく全盛期の父をも遙かに凌ぐ文字通り極限流最強の強さであることに相違ない。

テリーは、戦いを『語らう』場としてきたときから、自然とその力に枷（リミット）がかかってしまっていた。

八極聖拳の祖、タン・フー・ルー老師ですら畏怖する、その圧倒的な潜在能力。

いつのまにか『競技のうえでの強さ』としての枷（リミット）が、彼の潜在意識に刷り込まれてしまっていたのだ。

だが、今目の前にいる相手は、その潜在能力を解放するべき相手

タン老師、さらにはかのサウスタウンの帝王、ギース・ハワード、その異母弟であるヴォルフガング・クラウザー。

その三人の誰もが驚異に、そして恐怖に感じた余りある潜在能力。もはや誰しもにとっても未知数となる圧倒的な強さ。

それほどまでの強さと強さが、枷を解き放ち、真っ向からぶつかりあっている。

そんな戦いに、ユリは目を、心を奪われていた。

リョウ「虎煌…」

構えた右拳に闘気が収束される。

虎煌拳。

極限流空手の技のひとつで、収束させた闘気を撃ちだし、相手を攻撃する技。
しかし

テリー「チャージング Charging!!!!」

素早い踏み込みから強烈なタックル。

パワーチャージ。

主に連続攻撃に使用される、テリーの必殺技の一つ。
それが、虎煌拳の出掛かりに

ドガアッ!!!!!!

リョウ「ぐああああっ!!!!!!」

カウンターでパワーチャージを食らってしまったリョウの体が空高く舞い上がる。

さらにそこから

テリー「Beat Up!!!!!!」
ビートアップ

強烈なニーキックを繰り返しつつ飛び上がり、そこから拳を打ち下

ろして浮き上がったリヨウの体を叩き落す。

ズガアアアッ！！！！！！！！！！

リヨウ「ぐおおおおああああああつ！！！！！！！！！！」

ドゴオオオツ！！！！！！！！！！

空中で打ち落とされたリヨウの体が、そこに向かって投げつけられたボールのように地面に叩きつけられる。

パワーダंक。

得意スポーツであるバスケットボールからヒントを得た、主に対空迎撃に使用するテリーの必殺技。

二つの必殺技を駆使した、破壊力抜群のコンビネーション。

テリー「いくぜ！！！！！！！！」

そこからさらに畳み掛けようと、狼が猛然とダツシュして接近していく。

退くことを知らない

攻め抜くことしか知らない。

この狼には、攻め抜くことしか存在しない。

並の格闘家ならば、背筋を凍らせるほどの恐怖を味わい、退くことしかできない

途轍もないほどの重圧（プレッシャー）を身に纏い、前進していく。

リヨウ「く……」

よじやく半身を起こした時には、すでに間近にまで迫っていた。

牙を剥き襲い掛かる、猛り狂う狼の姿が

このまま畳み掛けられると、もはやどうすることもできない。
だが、この『無敵の籠』にも、後退の二文字は存在しない。
相手が襲い掛かるなら、それを逆にねじ伏せる。
優しさの中に秘めた、猛き籠としての闘争本能。
全ての枷を解き放ったこの男に、後退は似合わない。

リョウ「虎砲!!」

テリーが畳み掛けるよりも一瞬早く起き上がり、即座に迎撃の態勢を取る。

先ほどムクラックシュートの威力を倍返しした虎砲を用いて。
だが

テリー「Bin^{ビン}go!!!!!!!!」

ドガアッ!!!!!!!!

リョウ「ぐぶつっ!!!!!!!!!!」

身を沈めてそこから伸び上がりつつ背中^で攻撃、そこからさらに

ガガガガガッ！！！！！！！！！！

リョウ「ぐわあああああああああつ！！！！！！！！！！」

天空を貫かんが勢いで上昇し、荒れ狂う竜巻のごとくりョウの体を飲み込み、攻撃する。

ライジングタツクル。

テリーが最も信頼する返し技であり、その破壊力は抜群。

タツ……………ヒュウウウツ……………ドサツ…

リョウ「ぐ…」

完璧な迎撃のタイミングだったにも関わらず、さらにその上をいった『伝説の狼』。

またしてもリョウの体が重力に従って地面に落とされることに。

リョウ「(な…なんて男だ…カウンターを狙っていたところに逆にカウンターを仕掛けるなんて…)」

カウンターをカウンターで返す。

言葉にすればただそれだけのことなのだが

あの刹那にそれを実行するということがどれほどのことか。

教えてできることでも、教わってできることでもない。

だが、目の前の狼はそれを易々と、しかもためらいなくやってのけた。

その事実にも、また龍の体が震える。

リョウ「すごい…すごい…！俺は、これほどの相手とこれほどの戦いができることにこれまでにない喜びを感じている…！！」

無意識のうちにその枷を解き放ち、ただ本能の赴くままに戦っている。

それでもなお、立ちふさがられるほどの強さが、目の前にある。終わらせたくない。

この最高の戦い（かたらい）を。

リョウ「う…おおおおおおおっ…！！！！！！」

龍の咆哮が激しく響く。

ここまでを受けたダメージは決して少なくはない。むしろもう倒れていてもおかしくない。

だが、そのダメージを凌駕する闘争本能、そして闘争心が。彼の肉体を支え、立ち上がらせる。

テリー「あれでなお立ち上がるか…！！それでこそ『無敵の龍』…！これほどの相手と戦えることに血液が沸騰しそうなほどに喜びを感じるぜ…！！！！」

決定的かと思われたダメージから立ち上がるリョウ。

まだ、この戦い（かたらい）は続く。

自身の枷を解き放つてもなお立ちふさがられるほどの強さと向かい合うことができる。

攻めることしか知らない狼の猛り狂う前進は続く。

テリー「バーニング Burning!!!!!!!!!!!!!!」

青白く煌く炎に包まれた拳が唸りをあげて襲い掛かる。

最も得意とする必殺技、バーンナックル。

数多の強敵を倒してきたその拳が、龍の喉笛を引き裂こうと迫る。

リョウ「(今だ!!!ここしかない!!!) 極限流奥義!!!!!!!!!!!!!!」

テリー「な!!!!!!!!!!!!!!」

ズガアッ!!!!!!!!!!!!!!

テリー「ぐああっ!!!!!!!!!!!!!!」

すでに半死状態の肉体から繰り出されるのは、極限流最高峰の奥義。その名は、龍虎乱舞。

リョウ自身研鑽を重ね、練り上げてきたその奥義が今、目の前の最高の強敵を飲み込む。

まさに、龍の顎が獲物を飲み込むかのように

リョウ「いくぞ『伝説の狼』!!!!!!!!!!!!!!」

狼の拳を正面から飲み込み、龍の怒りが爆発する。

テリー「ぐはっ!!!!!!!!!!!!!!」

リョウ「オラオラオラオラオラア!!!!!!!!!!!!!!」

天に昇ろうとする愚かな人間が神の怒りを買うがごとく
その体はその怒りによって突き落とされるように、地面に叩きつけ
られる。

リヨウ「ッ！…ハア…ハア…ハア…」

しかし、満身創痍の状態で究極奥義まで放ったリヨウの肉体も、す
でに限界を超えつつある。

それでも、一瞬たりとも気を抜かない
いや、抜けない。
なぜなら

テリー「う…ぐ…」

『伝説の狼』の闘気は消えていない。

目の前の最高の強敵の闘志は、かけらもしぼんではない。
その傷だらけの屈強な体が、その闘志に呼応して反応する。

リヨウ「ハア…ハア…（龍虎乱舞をまともに食らって…なお…なお
立ち上がってくるか…心の底から尊敬できる男だ…アンタは…）」
テリー「ぐ…ハア…ハア…（こ…これが極限流…いや…『無敵の龍』
、リヨウ・サカザキか…心の底から…素晴らしいと思える男だ…）」

すでに両者の肉体は限界を超えている。

足取りもおぼつかず、立っていることすらやっとの状態だろう。

しかし、その顔には喜びを表す笑みが浮かび、その溢れ出して止ま
らないほどの闘志には全く衰えが見えない。

それどころか、より高まっていく。

自らが最高と認める相手。

その相手と、その力を最高にまで解放し、これほどにまで戦える。この二人にとってはこれ以上の幸福はないのかも知れない。

ユリ「ど…どうして？…どうして…そこまで戦えるの？…」

極限流の空手家としての道を歩み始めてから、幾多の試練に遭遇した。

でも、それを乗り越えてきた。

そのつもりだった

潜り抜けてきた修羅場の数も決して兄に劣らないつもりだった。

でも、今見ているものは、そんな自分の遙か上に行く…。

自分が潜り抜けてきた修羅場など、全くもって可愛らしいものだと思ってしまうほどの戦い。

しかも、それほどの戦いを笑みを浮かべ、心の底から歡喜を溢れさせながら挑んでいる

自らの肉体、いや、命すらも賭け。

己の持つ全てを燃やし。

ただ、目の前の壁を越える。

それだけのために一歩も引くことなく前に進み続ける。

そんな男達の姿は、傷だらけですでにボロボロの状態。ただ武骨に前に出て不器用な力と力のぶつかり合い。だが、ユリにはそんな彼らが、彼らの戦いが

あまりにも美しく、神々しかった

ユリ「（私じゃ…少なくとも今の私じゃ、この二人には遠く及ばない…私のお兄ちゃんは、こんなにも…こんなにも凄い人だったんだ…）」

本当ならばもう止めたい。

これ以上は間違いなく生死に関わってくる。

でも、あまりに武骨で不器用で

あまりにも美しく神々しくて

あまりにも天井知らずに成長し続けていくこの二人の純粋で真摯な戦いを。

そんな戦いを止めるといふ無粋な選択肢は、もうユリの中には存在しなくなっていた。

リョウ「おおおおお！！！！！！！！」

傷だらけでボロボロの体を奮い立たせ、自らの奥義をその身に受けても立ち上がってきた狼に龍が襲い掛かる。

今、最高の敬意と感謝を持ってこの男を倒す。

今、この最高の壁を乗り越える。

その溢れ出さんほどの想いと闘志が、この龍を突き動かす。

震えの収まらない足は、重力に抵抗して己の肉体を支えることで精一杯。

テリー「ハア…ハア…ハア…」

対するテリーも、満身創痍の状態でパワーゲイザーまで放ったことで全身は崩壊寸前。

弱肉強食のルールの中練り上げられた精神が、肉体を支えている。

テリー・リョウ「（次が…次が…最後の一撃になる…）」

もはや互いに放てるのは一撃のみ。

両者ともに、自覚している。

ならば、それに全てをこめよう。

それに、全てを賭けよう。

その最高の技で、この最高の戦い（かたらい）に

終止符（ピリオド）を打とう

その最高の力で、この最高の壁（つよさ）を乗り越

越えよう

『伝説の狼』と『無敵の龍』の壮絶な戦いも、いよいよ最高潮を迎える。

リョウ「おおおおおおおおおおおおおおお…！…！…！

…！…！…！…！…！…！」

でいく。

リョウ「霸王!!!!!!!!!!!!!!」

収束させた闘気が一気に解放される。

射程は己に向かって突っ込んでくる『伝説の狼』。

リョウ「翔吼拳!!!!!!!!!!!!!!」

収束された闘気が、強大な大砲となって撃ち出される。

霸王翔吼拳。

龍虎乱舞と双壁をなす、極限流の奥義。

その奥義が、解き放たれた。

猛然と突っ込んでくるテリーの眼前に、強大な闘気の砲が襲い掛かる。

しかし、テリーもすでに己の最高の一撃を放つ姿勢に入っていた。

テリー「ライブLive……」

闘気の収束する右拳が、その大地に叩きつけられる。

その瞬間、天空を貫く巨大な闘気の柱が発生する。

その柱が、霸王翔吼拳を

『無敵の龍』が放った最高の一撃を飲み込んでいく。

リョウ「な!!!!!!!!!!!!!!なに!!!!!!!!!!!!!!?????」

そして、狼の最高の一撃は、ここでは終わらない。

テリー「……We Are ワイアー!!!!!!!!!!!!!!」

『無敵の龍』の肉体が、その強大な闘気の柱に飲み込まれ大きく吹き飛ばされる。

そして、長い滞空時間の末
まるで、天にその罪を許されたかのように大地に落とされる。

この戦いをずっと見ていた、実の妹、ユリのそばに

ユリ「お兄ちゃん!!!!!!!!!!!!!!」

天から落とされ、ピクリとも動かずに横たわる兄のもとへ急ぐユリ。

ユリ「お兄ちゃん!!!!!!!!!!!!!!お兄ちゃん!!!!!!!!!!!!!!」

必死な妹の呼びかけにも、その肉体は微動だにせず。完全に意識を失っている。

が

ユリ「…よかった…息はある…」

その生体活動まで失うことはなかった。
その事実にも、ひとまず安堵するユリ。

ユリ「!…テリーさんは!?!…」

そして、兄である『無敵の龍』と壮絶な戦いを繰り広げた『伝説の狼』。

テリーの方へと視線を向ける。

テリー「……………」

テリーは、自身の最高の一撃を放った状態のまま、微動だにしない。トレードマークの帽子は弾けたのか、遠くに飛ばされ。

腰まで伸びた長い髪はそれを留めている紐が弾け飛び、霧散しており。

しかし、そのまま身動き一つすら取らない。

ユリ「テ、テリーさん!!??」

その場からユリがテリーに呼びかける。

その瞬間

グラッ…

ユリ「!!!!!!」

まるで糸の切れた人形のように、前のめりに崩れ落ちる。

そして、その大地にひれ伏すかのように、うつぶせに横たわる。

ユリ「テリーさん!!!!!!」

この戦いの唯一の観戦者が、テリーの元へと走る。

ユリ「テリーさん!!!!!!……!!……!!……!!……!!……!!……!!……!!」

ユリの懸命の呼びかけにも全く反応がない。
完全に意識は失われている様子。
だが

ユリ「…よかった…テリーさんも、息があるよ…」

その生体活動までは失われることなかった。

ユリ「すごかった…すごかったよ…二人とも…なんだろう…分かんないけど…涙が溢れて…」

互いに認め合う最高の強敵が繰り広げた死闘。

そこに言葉や小手先の技など、無粋なものはなく…。

ただ己の力で。

ただ己の魂で。

ただ己の全てを以てぶつかり合う。

武骨で不器用で…まるで猪のぶつかり合いのような単純明快な戦い。

しかし、その力、その想い、その魂を真っ向からぶつけ合い、互いを理解しあう…。

あまりにも純粹で…。

あまりにも真摯で…。

あまりにも真っ直ぐな二人の最高の戦いに…。

ユリは心を、魂を震わされ、涙を流さずにはいられなかった。

ユリ「せいっ!!!!!!!!!!!!!!」

太陽が顔を出すか出さないかの早朝。
凜とした声が道場内に響く。
繰り出した拳から、汗が飛び散る。

リョウ「お、今日も早いな」

その言葉と同時にそこに姿を現すのは、極限流空手の二代目であり、『無敵の龍』と呼ばれるリョウ・サカザキ。

トリードマークであるオレンジの道着に身を包み、稽古に入る準備は万端。

ユリ「押忍!!お早うございます!!」

リョウ「押忍!!」

『伝説の狼』と『無敵の龍』の壮絶な戦いから二週間。

あの日以来、ユリに変化が見られた。

リョウ「(しかし、何があったんだ?この変わりようは一体?…)」

あの日以来、常にリョウの方が道場に入るのは早かったのがユリの方が早くなった。

あの日以来、稽古の場でもななあな態度が目立ったユリが、こうした礼節を重んじるようになってきた。

あの日以来、稽古に取り組む姿勢そのものにより一層の真剣さと凄みが加わるようになった。

リョウ「(きつかけとしようと…あの戦いくらいしか思い当たらないんだが…なんだろ？分からね…)」

『伝説の狼』テリー・ボガードとの戦い
まさに、『凄まじい』の一言に尽きるものだった。

拳と拳のぶつかり合い。

力と力のぶつかり合い。

小細工も何も存在しない。

まさに、『真つ向勝負』だった。

どちらが勝ってもおかしくないほどの勝負。

テリー曰く、「最後の攻撃を放った時点で俺は意識を失っていたからなく。これは引き分けってことでいいんじゃない？」ということ。

彼ら二人の最高の勝負は、『一応は』引き分けということになっている。

『一応は』というのは

リョウ「(テリーはああ言ったけど、俺自身は俺の負けだと思っている)」

自分に厳しいからだけではない。

最後の一撃のぶつかり合い。

あれは、明らかに自分の方が負けていた。

そして、何より

リョウ「(パワーゲイザー…あれほどの技を三連続で繰り出すなんて真似ができるとは…)」

その秘められた潜在能力の高さ。

タン老師、そしてギース・ハワード、ヴォルフガング・クラウザーまでもが恐怖したほどの。

それを、我が身を以て知ることができた。
あの男は、これからもさらに強くなっていく。

リョウ「俺も、負けっぱなしではられないな…」

あの『伝説の狼』には。

引き分けで終わったからこそ、互いが互いをより大きな壁として。
そして、そのさらに大きくなった壁を乗り越えんがためにより強くなる。

妹のためにその身を粉にして強くなり続けたかつて。
しかし、今は超えるべき目標がいる。

自分に戦うことの楽しさを教えてくれたあの男が

心を痛めながらも取り組み続けてきたかつての頃とは違う。
自らが望み、楽しさと感謝を以て取り組むことが出来る。
その喜びを抱えながら、『無敵の龍』は今よりもさらに強くなる。

ユリ「お兄ちゃん…ありがとう…」

そして、妹、ユリはあの日からより目の前の兄に感謝の念を運ぶようになった。

ユリ「私が弱かった時はずっと護ってくれて…今は何者よりも大きい目標になって私の前に立ちふさがってくれて…」

かつては自分のために、自分を護るために心を痛めながらも戦い続

けてくれた兄。

今では何者よりも大きな目標となって自分を導いてくれる兄。常に自分のために動いてくれる兄。

そんな兄がいてくれたこと。

そんな兄の妹としてそばにいられること。

その全てが、ユリにはたまらないほどにありがたく、嬉しいこととなっている。

ユリ「（そして、お兄ちゃんに戦うことの楽しさを教えてくれたテリーさんも…）」

妹の自分を免罪符に戦い続けてきた兄が、自分の意思で楽しさと喜びを以て戦うようになったこと。

ようやく、自分のためだけに生きてきた兄が己のためにも生きることができるようになったこと。

そして、そのきっかけとなった『伝説の狼』にも感謝の念は尽きない。

ユリ「（そして、テリーさんは私にも…お兄ちゃんがこんなにも素晴らしい格闘家だったことを教えてくれた…）」

『素質』だけの強さではない。

その力、そして精神、魂までも練り上げ続けた『本物の強さ』。

その『本物の強さ』をずっと磨き続けている兄。

そのことに気づかせてくれたのも、『伝説の狼』。

ユリ「（二人のところまでたどり着くのになんにかかるとは分からないけど…でも、絶対に届いてみせるから…！）」

今はまだ見ることすらできないその背中。

でも、いつか必ず…。

その想いを胸に、ユリは今日も稽古に励む。

これまで兄がそうしてきたように、己を磨いていく。
その覚悟を以て。

(後書き)

この作品に目を通してくださった方、または最後まで読んでくださった方。

ありがとうございます。

この二人の本当の意味での戦いというのを一度書いてみたいと思い、書かせて頂きました。

私の中でイメージがかなり優先されていますので、もしかすると他の方々のイメージにはそぐわないものになっているかもしれませんが、そこはご容赦頂きたく思います。

やっぱりこの二人はアツいキャラでいて欲しい！！
そんな想いが駄々漏れの一品となりました。

次はまた別の作品でお会いできたら、と思います。
ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9859p/>

最高の親友（ライバル）

2011年1月11日14時22分発行